

第3回美術クラブ例会「美術の力-逆境の中から誕生した傑作選」(12/12) 報告

◆◆◆コロナ禍により2回延期されていた美術クラブの例会が、万全を期して2020年12月12日に無事開催された。これまでの活動は、序章として2018年3月に「ゴッホ展」(京都国立近代美術館)、第1回目は2018年9月に「フランス風景画展」(国立国際美術館)、第2回目は2019年7月に「ギュスターヴ・モロー展」(あべのハルカス美術館)といずれも美術館での鑑賞会で、講演会形式は今回が初。実物はない分、画像をふんだんに使って、レンブラント、ゴヤ、ゴッホ、ピカソという17~20世紀の巨匠たちによって逆境の中で生み出された傑作群を辿った。冒頭で私は奈良の大仏様の話をした。疫病が蔓延し、天災、人災が繰り返される過酷な時代に、国家の安泰と人心救済の象徴として巨大な盧遮那仏が建立されたこと。信仰の力とともに見る者を圧倒する造形の存在感と、だれも見ることが無い地獄や極楽を、さも眼前にあるかのように具現する美術力に、往時の人々は夢を託したのである。洋の東西を問わず、困難な時代にこそ美術は一層の光彩を放つ。生み出された名作の数々は悲劇や苦悩を越えたところにある「夢と希望」を垣間見せてくれるものだ。人間への信頼、そして生命への賛美。

疲弊した人心を復活させる美術の奇跡がそこにある。コロナ禍の今日、まさに「美術の力を今こそ！」である。ご参加いただいた方々に心から感謝申し上げます。(南城守)



「我が子を食らうサトゥルヌス」
 (「黒い絵」連作 1819-1823, プラド美術館)『西洋絵画の巨匠ゴヤ』
 小学館 より

◆◆◆あつという間の90分でした。絵画作品の中に秘められている時代性、画家の人生、そこから生み出された芸術性について本当にわかりやすく解説していただきました。描かれている題材、絵の印象や描写の技法など、今まで何となく好き嫌い、印象的、といった感じで見ていたものが、生きて自己主張して語り掛けてくるのだという思いです。その語り掛けが見るものに呼び覚ます感動が芸術なのかと思います。あらためていろいろな絵を見てみたい、個人的には、レンブラントについてもっと知りたいという思いが強くなりました。他の画家や作品についても、又お聞かせいただける機会を作ってください。(白鳥保二)

◆◆◆待望の美術クラブ例会、至福の時間を過ごしました。現在、戒壇堂工事のため東大寺ミュージアムで特別公開されている四天王立像の見どころに始まり、その仏師国中公麻呂が大仏建立・東大寺造営にあたり、現在のコロナ禍の社会状況を彷彿させる天平時代の疫病猖獗・地震天災・政治の乱れを鎮護国家によって終息させようとし、その成果がまさに逆境の中でここ奈良の地に花開いた(身近にあるため日頃気付かないが現在の視点では美術の力とか言いようのない)世界遺産であったことを痛感しました。巨匠たちの生涯とその逆境の中で誕生した傑作群の解説に聞き入り没頭していると、あつという間に時間が過ぎてしまいましたが、先日、「ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」で、レンブラント、ゴヤ、ゴッホの作品を鑑賞した時、南城先生の語りが甦り一層深い感銘を受け、このコロナ禍の中で人は美術の力に励まされに、美術館に足を運ぶのだなど感じ入りました。次回の例会は、ピカソのパリ時代の画風の変遷についてもっとお話を伺えたらとリクエストいたします。(吉村公彰)

◆◆◆「なぜこんな絵が描かれることになったのか」。「それがとんでもないことが起きたんです」。一瞬講談を聴いているような感じにも襲われました。17世紀以降の4人の画家の4枚の絵に焦点を当て、途中、厨房画、肖像画の話、絵具の材料の話、レンブラント光線、キュビズムの誕生と経緯など、美術の基礎的な知識が織り交ぜられ、さてこの4枚の絵がどうつながるのかと心配しながら聴いていたところ、そこに明快な主張がくっきりと浮き彫りにされました。豪華な生活から転落した極貧のなかで注文もなくなり仕方なく自分のために描いたというおぞましい静物画、大病し社会的動乱に巻き込まれたあげく描かざるをえなくなった悪夢の図、仲間から見捨てられ家族からも忌み嫌われ最後は自殺にいたる狂気の風景画、数千人の女性や子どもが惨殺された爆撃を告発する怒りをこめた絵、いずれも苦難な状況に直面し、それを突破しようとするエネルギーが誰も見たことのないような絵の風景を出現させたわけです。最後に、ゲルニカの絵の片隅に描かれた一輪の花に象徴されるように、芸術の力にこそ「夢と希望」を託すべきだと言われたのが印象的でした。(杉谷健治)



「星月夜」(1889, ニューヨーク近代美術館)
 『「ゴッホの夢」美術館』小学館 より